２０２３年「未来」名古屋大会　「岡井隆と平成短歌」　　大井　学・加藤治郎

二〇二三年十月七日　於　ＪＲゲートタワー　カンファレンス

◆　大井学の選んだ七首

帆柱の霧を分けゆく日々なりき戦争を書けば戦争つて　パ　　『夢と同じもの』

（注）ぱでできた街ゆゑここにミサイルは降らないそれに幸福もない　　荻原裕幸『あるまじろん』

円陣を組むごとくまた解くごとし明日からは日のよみがへる夜に　　『大洪水の前の晴天』

虚ッ、虚、虚、虚、虚、虚と鳴く鳥の夜なくは教へ顔なるいぢましさかな　　『ヴォツェック／海と陸』

風といふ無名の岸に憩ひたるさくらの枝に声をかけたり　『〈テロリズム〉以後の感想／草の雨』

左翼つて左の翼うつくしい翼だつたよだから飛べない　　『家常茶飯』

現代語のうちを流るる清らなる韻律の河、無いから欲しい　『Ｘ（イクス）―述懐スル私』

浮島をみたころからか（いいや）その前からだらう　気付いてはゐた　　『静かな生活』

◆　加藤治郎の選んだ七首

□□（注、空白（ブランク）は白きが故にどちらかが先立つといふ女男（めを）のかなしみ）　　『神の仕事場』

「短歌パラダイス」一九九六年三月　伊豆多賀温泉

民族よ寄するおもひは冷えながら並木に生（あ）るる花のしづけさ　　『大洪水の前の晴天』

隣り家の麺麭焼竈（パンやきがま）の煉瓦（れんぐわ）かな並（なみ）の迷宮ぢあないつてば　　『ウランと白鳥』

短歌は耳から聞いてわかるか、といふ実験である。そのときわたしは未発表の自作をつとめて読まうとした。「酒田行」「海と陸」がそれである。このあと自分が無意識のうちに朗読を前提として作歌してゐるとおもふことがあつた。

うらさびしいダイエーで襯衣（シャツ）を　海風に耐へられるだけおしやれな白を　　『ヴォツェック／海と陸』

はじめての寂しい町で門を見た象の彫ものの鼻がをかしくて　　同

Mama, don’t go（母さん！　行く　な。）、の叫びかすかにDaddy, come home（父さん、　かへつて　来て！）はつひに耳を聾せり　　『臓器　オルガン』

百人一首たたんで捩れひ弱なるその草色の歌はいらない　　同